

誰もが響きあう関係をつくるために

1 設計理念

震災と音楽 場を共有する

3.11 の後間もない頃に、仙台フィルがまち角で演奏した音楽が人々の心を支えたという話があります。未曾有の状況下、音楽を通じて人と人がつながり合うことができたのです。それは形を持たない「場」を皆で共有する体験です。震災は形のある都市を破壊し、そのことは大きな不安をもたらしました。その時、形はなくとも皆で共有する音楽という存在があったことは、大変重要なことだったのではないかでしょうか。



都市の文化がつながっていくこと 有形の場と無形の場

「災害文化」とは「災害は発生するものと認識した上で、災害が起きて、それを乗り越える術を持った社会文化」と定義されています（仙台市震災メモリアルWEBサイトより）。これに対する解釈は幅広いですが、災害によって目に見える都市の形は変わってしまう、都市の中で紡がれてきた文化に根付く場が共有されることによって、再び文化をつなげていけるということではないでしょうか。

リサーチにおけるヒアリングの中で、仙台の七夕祭りは関東大震災をきっかけに始まったという話を伺いました。祭りはまさに形はなくとも皆で共有される場であり、記憶と共に受け継がれていくものです。

形ある都市は、時間とともに変化していきます。その変化の要因には災害も含まれています。時代と共に変化し続ける有形の場としての都市と、時間を超えて記憶と共に受け継がれていく無形の場の両方があることで、まちの文化がつながっていくのです。

海とまち 記憶をつなぐ活動

海側のエリアでは、震災から5年後に荒井駅に「せんだい3.11メモリアル交流館」がつくれられ、また中心市街地エリアでは、震災年から始まったせんだいメディアテークでの「3月11日をわすれないためにセンター」を中心としたアーカイブ活動が、今も続いている。それぞれの活動には多くの市民が参加し、災害文化を伝える活動が既に展開されています。メディアテークと同じ市街地エリアで新施設に求められることは何か、ホールと一体となることの意味は何か。海側の人々に遠慮して自らの被災体験を語れないまち側の被災者もいるといったお話を実際に活動や運営を行う方々から聴きながら、話し合ってきました。

いつもそこにあること

せんだいメディアテークは誰もが訪れて活動のできる、高流動的な空間です。そこでは一つの活動が特定の場を占拠することなく、様々な情報や活動がフラットに展開され、その活動の履歴は、空間ではなく情報としてアーカイブされています。

一方、新施設は仙台フィルの拠点であり、まちなかの震災メモリアル拠点です。文化をつなぎつづける拠点として、まちに開かれ、まちの歴史に深く根付いた文化活動や活動にふさわしい空間性が“いつもそこにあること”が求められている、という考えに至りました。

都市の骨格 永く変わらない地形

新施設の敷地はかつての武家屋敷エリアにあります。広瀬川の河岸段丘によってつくられた地形は、永く変わらず仙台の都市の骨格を形づけてきました。中心市街地から少し離れたこの歴史深い場所にたつと、直接は見えない川の輪郭が都市の立面により浮き立って感じられます。かつてはこの都市の骨格がまちじゅうから感じられたのでしょうか。

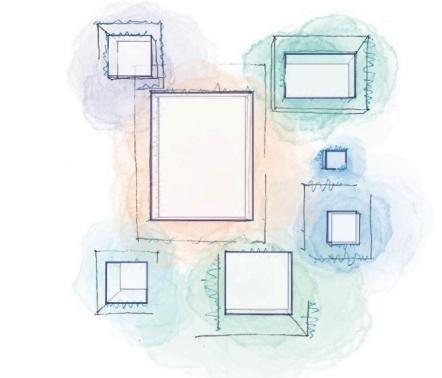
新施設では都市の骨格とともにまちという場の共有を再び取り戻し、また施設そのものもまちや文化を形づくる地形のように、永くこの場所に存り続けることが大切です。

響きあう関係をつくる 音楽ホールと震災メモリアル施設がともにあること

音楽とは、音の響き、心を打つ空気のふるえです。ホールとは、その響きを皆で共有する器です。そこで私たちは音楽を受け取るだけでなく、その場の高揚感を皆でつくりあげています。すなはち有形の器の中に、響きあう無形の場が生まれているのです。災害を想うと、私たちの心はふるえます。震災メモリアル施設は各々の心のふるえを、都市の記憶や心の風景を通じて共有する器です。そこにはやはり響きあう関係が生まれます。音楽ホールと震災メモリアル施設は、有形の器の中で響きあう無形の場を共有する、という点においてつながっているのです。

私達の提案は、響きあう無形の場が複数存在し、その響きあいによって人々がつながることのできる建築です。その一つは音の響きであり、光や風のような環境の響きであり、活動の風景の響きであり、震災を含んだ都市の記憶の響きです。

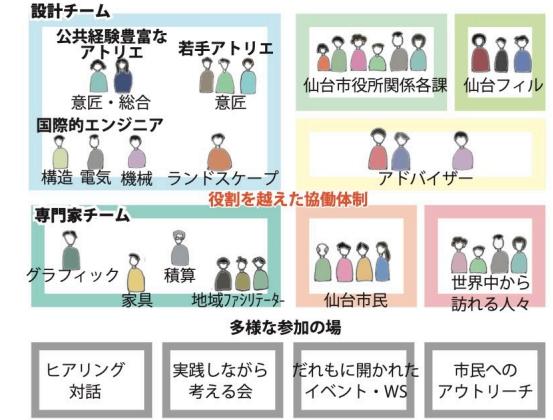
幾つもの無形の大きな空を皆で囲み、響きあう関係が生まれる有形の器をつくります。



2 設計を進めるうえで特に留意すること

高度な専門性と取り組みの柔軟性を併せ持つチーム体制

私たちは、ホールを含む公共施設などの経験豊富な代表事務所と建築からプロダクトまで幅広いものづくりを手掛ける若手事務所による協働チームです。構造や設備・環境計画は国際的エンジニアと連携し、高度な専門性を発揮します。さらに様々な専門家をチームに加え、各々の役割を超えて高い知見を持ち寄る協働体制をつくります。



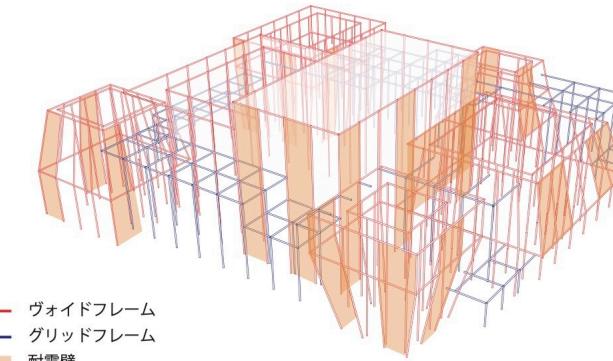
誰もが様々な想いで多角的に参加できる場づくり

音楽への想い、震災への想いは人により様々です。またそこへの関わり方も自由であることが重要です。市民参画においては、誰もが参加できる開かれた場から深く対話を重ねる場まで、複数の参画の場をつくります。複数の参画の場を併走させることで、より多角的な意見や関係性を可視化し、設計だけでなくその後の運営へもつなげていきます。

3 コスト縮減についての提案

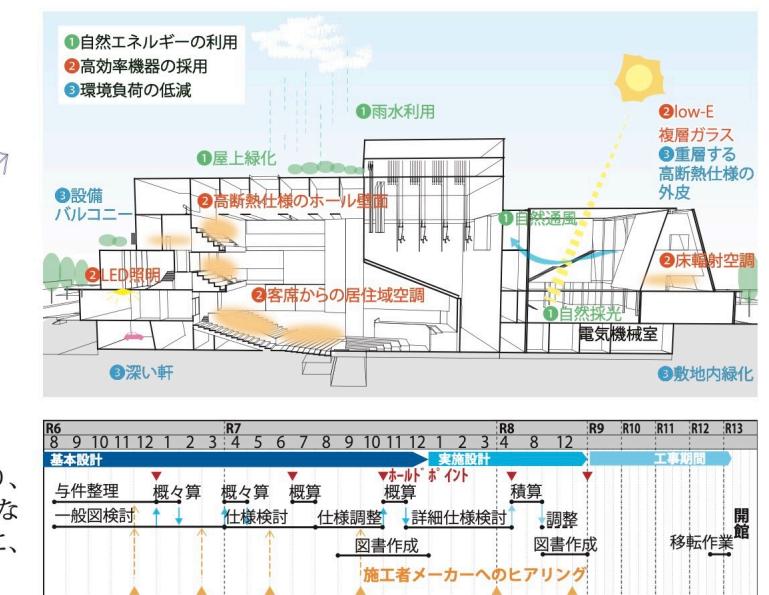
バランスの良い構造形式によるイニシャルコストの合理化

構造は大スパンや複雑な構成に対応しやすい鉄骨造とし、バランスよく配置した耐震壁により合理的に耐震性能を確保します。重層的な壁面の構成によって、断熱性や遮音性といった環境性能を段階的、効率的に確保します。また、冗長性の高い構成することで、今後の面積縮減にも柔軟に対応可能です。



省エネルギーと高効率化によるランニングコストの縮減

①自然採光、自然通風などの自然エネルギー利用、②気積の大きな空間に対応した床輻射空調などの高効率省エネ機器の採用、③高い外皮断熱性能の確保などによる建築による熱負荷の低減により、一次エネルギー消費量を、基準建物に対して50%以上削減し、ランニングコストを削減します。



オンラインで物価動向をふまえた確実なコスト管理

公共施設設計の経験豊富な管理技術者と積算主任技術者により、設計の節目節目で概算を行い、社会情勢をオンラインで観測しながらコスト管理を実施します。また地域情勢を把握するために、施工者・メーカーへのヒアリングを逐次実施します。

4 将来の大規模改修を想定した設計上の配慮

変化の時間軸が異なる要素を混在させる

建築の要素に対して変化の時間軸を明確に区分し、様々な時間軸を持つ要素が混在する空間をつくります。変化していく要素を明確にすることで、更新し続けやすく、同時に大きな建築の骨格は残り続ける「動的な状態」をつくることができます。

具体的には、ヴォイドフレームに耐震要素を集約することで、乾式間仕切りの変更を容易にします。また、階層をまたぐヴォイドフレームの二重の仕上げの間に設備ルートを確保することで将来更新が容易にできるものとします。

情報	毎日変動
什器	数ヶ月 / レイアウト変更 10-20年 / メンテナンス、入れ替え
仕上げ	5-10年 / メンテナンス 数十年 / やり替え
設備	10-15年入替
間仕切り	数十年変更
構造	100年以上

更新性の高い汎用的な設備システム

特に10-15年程度で更新の必要な設備については、市場に流通する汎用的な機器を採用します。長期的にメーカーのサポートを受けやすく、また修理等が必要な際にも部材が手に入りやすいため、大規模改修だけでなく日常的なメンテナンスにおいても有効です。

明快な設備ルートと外周テラスの活用

設備ルートとなるべくシンプルかつ短くし、また外周のテラスを活用することによって、日常のメンテナンスや更新工事の手間がかからず、工事費用を抑えることができるものとします。

シンプルなグリッドフレームによる自由度の高い構成

大スパンのホール等を除いて、構造はシンプルな6.5mグリッドフレームを採用しており、将来的な間仕切りの変更が行いやすい自由度の高い構成とします。また、随所にバランスよく配置した耐震壁は、活動の場の手掛かりとなります。